

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第18回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事要旨

■日時：2024年1月12日（金）14:00～15:40

■場所：釧路市交流プラザさいわい3階 小ホール

■出席者：（敬称略・順不同）

<専門家>

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

<学校教員>

- ・釧路市立新陽小学校 柴田 康吉
- ・釧路町立別保小学校 田中 有香、平田 龍一郎
- ・釧路町立富原小学校 齋藤 真貴
- ・鶴居村立下幌呂小学校 長谷川 順子
- ・鶴居村立幌呂中学校 長谷 泰昌

<学校教育行政機関等>

- ・北海道教育庁釧路教育局 教育支援課 社会教育指導班 主査 角田 淳
- ・釧路市教育委員会 学校教育部 教育支援課 指導主事 柴田 題寛
- ・標茶町教育委員会 指導室 指導室長 富樫 慎也
- ・釧路湿原国立公園連絡協議会 事務局次長 元岡 直子、事務員 佐藤 英樹
- ・釧路市こども遊学館 事務局長 小笠原 忍、学習担当リーダー 古野 俊也

<ワーキンググループ事務局>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 境 耕平、石下 亜衣紗
- ・公益財団法人北海道環境財団 山本 泰志、安田 智子

■議事次第：

1. 開会
2. ワーキンググループの取組報告
3. 今後の取り組みについて
4. 閉会

■議事概要

1. 開会

《配布資料確認、委員自己紹介》

2. ワーキンググループの取組報告

委員より補足の発言を得ながら、事務局より資料1について説明。

《委員からの補足》

- ・富原小学校4年生では、これが3回目のフィールド学習となる。この学習後、子どもたちのテーマが明確となり、個人追及という形となった。自分たちでできる限りの資料を集めて、まとめを進めている。2月後半の参観日に発表する予定で、講師の方にも来てもらいたい。
- ・下幌呂小学校3年生では、湿原の再生事業の現場を見に行く活動を2回おこない、生き物や植物を採ったり、触ったりして見せていただいた。湿原をテーマに課題を持って調べ学習をおこない、10月の学芸会でパネルを使って保護者の方、地域の方に発表した。

3. 今後の取り組みについて

委員より補足の発言を得ながら、事務局より資料2について説明後、意見交換を行った。

《委員からの補足》

- ・別保小学校5年生では、3学期に入ってボードにまとめていく作業が始まっていく。2月4週目には発表会をおこなう予定で、その後のパネル展示についても役場と相談し実施する予定。
- ・釧路市こども遊学館での口頭発表会は昨年度から開始し、今年度は3月10日（日）に開催予定。様々な学校の発表を聞き、多くの人に発表を聞いてもらう機会となり、専門家からのコメントを受けて子どもたちの自信につながる場ともなっている。各機関から賞の授与、体験的な副賞も用意し、それも子どもたちのモチベーションにつながる。ポスターセッション方式での発表を企画しており、他の発表も聞き内省しながらブラッシュアップできるような機会にしたい。子どもたちにとって成長につながる機会であり、ぜひ発表してもらえたらと思う。見に来るだけでも子どもたちにとって学びがあると思うので、来館いただけたらと思う。
- ・学校支援ワーキンググループ（以下、WG）のホームページには検索機能がなく、教員が使うものであれば3クリック程で情報にたどり着けなければ、人が代われば使えないし、子どもが自分で調べることができるサイトになっていかない。データベースとして、過去の質問と回答の事例、探求事例を掲載し共有することで、さらに深い探求に進んでいくことができ、先生が見通しを持って進めることができる。このデータベースに必要な機能を考えてみるのが今後重要ではないかと思う。
- ・学校や地域が変わると、学校での取り組みも大きく変わる。前任者に聞きながらやれば良いが、異動などにより更地から始まってしまうこともある。子どもたちが一から興味を持って探求していくことが大切だが、データベースとして有益な情報の蓄積もできればと思う。子どもたちが自分で検索して活用できるようになると探求も効果的に進めることができる。

《学校教育行政機関等からの意見》

- ・どのような子どもを育てていくか、学びを今後どのように生かしていくかがポイントになる。この学習を通して、子ども自身若しくは周りの人間の行動変容にどのようなつながるのか、学年に応じた系統性が出来てくると素晴らしい活動になっていく。
- ・釧路市では、キャリア教育を軸に、環境、防災、福祉など各分野で、こうした集まりがあり、これらの情報を一元化したサイトを作ろうと考えている。そこにWGの情報を掲載し、学校に共有する流れを作ることができればと思う。各学校で蓄積されていくべきものであるが、各学校の情報を得ながら、より良いものにしていくということも必要であろう。

- ・標茶高校の探求的な活動や小学校同士をどのようにつないでいくかが町教委の役割だと感じる。今後の取り組みの3点が実現できれば、持続可能になっていくだろう。
- ・年度初めに情報交換会を行うことは大変良い。学校では年度末は多忙な時期であり、学校で情報を整理する期間も考慮すると12月に実施することが適当。引き継ぎは学校内で行うべきことで、そこまで考慮しなくても良い。
情報の蓄積については、いかに効率的に情報を提供できるかが大切。弟子屈町では、小学校、中学校、高等学校の環境学習を整理しており、来年度に窓口の整理を行う。湿原に関わる学習についてはWGを窓口として掲載するなど、つなぐ役割はできる。それぞれの立場でこういった情報を引き継ぎがなければいけないかを整理しなければ持続することが難しくなる。
- ・オンラインで情報交換会を行うのであれば、学校で管理職と担任の先生が複数で参加することは可能で、参加した管理職が次年度に引き継ぐこともできる。
- ・情報交換会で新しい学校も対象とするのであれば、使える予算を想定して次年度の授業を組んでいくことも情報提供していければ、次年度以降の組み立てがしやすいのではないかと。市町村の財源だけでなく企業寄付等の情報も提供できれば良い。
- ・ラムサール条約30周年記念として、小学校、中学校、高校生による湿原学習の発表会をおこなった。ベースになったのは、釧路湿原サイエンスフェアで、複数の学校が集まり発表しあうことは素晴らしいと感じた。
- ・釧路市こども遊学館では自由研究をしたいという問い合わせが夏休み、冬休みは多い。湿原に興味を持ち調べたい子ども沢山いるだろう。社会教育施設がリンクを貼って、子どもたちも活用できるサイトになれば、多くの子どもたちが目にする事ができ地域全体で応援できる。
- ・効率的に情報をためて効率的に情報を使うということの他に、対面でのやりとりを通して非効率的に行う過程が大切なこともある。どちらを取るのが良いかということの検討も必要。

《学校教員からの意見》

- ・予算の部分では、町村はバスを持っているので融通が効き、釧路湿原をテーマに探求学習をおこなっていくポイントとなる。規模が小さい学校も多く、入りにくいフィールドへの移動、専門家の声を聴ける人数での移動に大変有利で、(総合学習の観点である地域の)ひと、もの、ことに関連させる部分では、そのあたりを大事にすると、自然環境を大事にしていくという観点では有効。
外部団体が情報を保管し支えてくれていることは大変ありがたく、人間関係の引き継ぎが出来ていることが大きい。児童が調べる段階のものは自分で調べた上で、その先で専門家とのやりとりの過程を通して身に付けると良い。データベースにリアルタイムで児童の学習状況を掲載することで、異なる地域、学校間での児童同士の情報交換や交流が可能となり、専門家でも対応しづらい探求に踏み込むことができる。共同で探求をおこなったり、ZOOMで対話することも今であればできる。各校のレベルが上がってきているので、そうした広げ方もでき、考えていく機会になるのではないかと。
- ・今年、何年かぶりに湿原学習に取り組んだが、オンラインの質問ができたことが有難かった。相手にアポイントを取り、時程を決めて自分で直接聞き、回答をもらえる。その過程を勉強しながら自分で知りたいことを学ぶことができた。質問の内容は学校の中で精査していくべきことと思うが、湿原だけではなく、そういったことも学習を通して学ぶことができた。
ボードのまとめ方などが共有サイトに掲載されていることは、これからやる学校にとって、事前にそれを見て勉強することができる。やりたい時にここにあると事前に情報をもらう姿勢で学校が取り組むと良いと思う。
- ・毎年湿原学習を行うというテーマは決まっているが、中身は各先生任せというところが強く、全く湿原についてわからない中でスタートした。次年度に手伝ってもらえない可能性もあるのであれば、子どもたちの中でも差が生まれてしまい、次の人に伝える難しさを感じる。
- ・学校で引き継いでいかないといけないこと、この事業に頼りきりではいけないということに

ついて、教師個人の意識や資質で引き継ぎのレベルが変わることに課題を感じていた。自分が苦手な部分を補うものとしてデータベースのイメージを持った。データだけを残すのではなく、課題設定や探求の過程など、大変な部分を次の担任、管理職や教務主任に共有し、生の人間とのつながりを引き継ぐことができれば、この問題は解決していくかと思う。

- ・引き継ぎについては、単元計画に必要な情報を書いておけば先生の目に必ず触れる。1回目ではこういうことが大切、2回目ではさらに調査するなど簡単なもので良い。学校ではロイノートを使っているが、皆が入れるホームページのリンクを入れておきたい。そこを見ればわかるという情報を簡単に見ることができるようにしておく、引き継ぎ易い。
- ・子どもたちが自分たちで実際に触れることが一番。先生たちの中でもだいぶ話が通じるようになったと実感する。長い間続けていること、発表会などを行っていることで知名度も上がってきている。そういう意味でもとっつきやすくなってきたと感じる。

《専門家からの意見》

- ・釧路湿原を使った学習の目的として、湿原を使うことによって子どもたちをどのように成長させたいかということがメインにならなければならない。蓄積した情報を効果的に活用することは大事だが、学年それぞれの発達の段階があり、これを次の時代に繋ぎなさいというのは間違い。何のために湿原を使うのかを考えた時に、やはり探求だと思う。湿原をなぜ使うのか学校の体制の中できちんと理解してもらうとともに、我々も理解しなくてはならないだろうし、環境省にも、そこを理解してやってもらいたい。

湿原は子どもたちが探求する素材を見つけやすい、様々な人とのつながりやすい題材であり、様々な子どもたちが課題を見つけることができるようになるということは、大きな成果。教室での学習に先立ち湿原に行くということが重要で、それが探求の始まりを作っていることにつながっていく。湿原にはそう多くは行けないが、その時に教室で課題を見つけさせるのではなく、学校の周りの環境で課題を見つけさせ、他の場所と比較させる方法もある。比較することは探求の中でとても大事なことで、探求の題材をどう使ってあげるかが必要になる。

探求の過程を学習するために、湿原は素晴らしい素材であるということがわかってきた。探求のプロセスを子どもたちに理解してもらおうと研究発表ボードを作ったが、だいぶ位置づいてきたと感じる。その作り方はどんどん伝えていって良い。サイエンスフェアで評価する場もでき、そのプロセスもとても良い形になった。今、次のステップに上がってきた。先生方がどうつながるかということを中心に、情報交換会に出れば良いとわかってくれば、先生方は安心してできるようになる。昨年おこなった子どもたち同士のオンライン交流会が位置づくようになれば、児童同士の研究の交流もできる。先生方同士の交流もできるようになってきた。そして、発表の場が今回できた。学校でおこなう発表を我々が見に行くこと、いろいろな人に公開することもできるようになってきた。インターネットを通じて他の学校に発表会を見せるといったこともできるようになるかもしれない。最終的に成果を次の時代にどうつなぐかということも試行されようとしている。

湿原を題材にして探求的な学習を進めていくためのシステム、先生方に合うシステムができ、子どもたちもそこを活用すれば良いということができてきた。これをどう継続していくか。総合的な学習の時間に湿原をおこなう場合、先生方は教えなければならないという束縛は外し、私も学ぶので一緒にやろうという体制になっていけば良く、学年ごとに様々な素材を使いながら探求が進んでいけばよい。探求のプロセスを何度も繰り返しやっていくことで、今の日本の教育の課題である探求する力がつくのではないかと思う。高校の発表を見ても、釧路は探求の力が弱い。釧路には素材が多くあるので、探求の力をつけることを繰り返しやっていけばもっと伸びる。この湿原を活用した探求は、釧路の子どもたちにとって、自分はプラスになると信じている。

《座長からのコメント》

- ・情報をどのように扱うか、新しいことが求められており、その一つのきっかけとして、情報交換会に図書館長が参加してくれたことは画期的なこと。
- ・上手に引き継ぐノウハウを考えていくことが必要。どうすればスムーズにできるか、新しいことを学ぼうとどうやったら思ってもらえるかも含めて、WGにも役割がある。
- ・コンピューターのオペレーティングシステムの発達というのは、簡単に言えば、検索機能の発達。そういうものを上手く利用すれば良い。
- ・先生は、教えるだけではなく子どもたちと一緒に学ぶことができる存在。先生方はそういったものの見方で自分たちも生きていかななくてはいけない。そういったことを目指していききっかけになればと思う。

《事務局のコメント》

- ・今年度同様に対応できない状況になったとしても、情報交換会で様々な専門家とつなぐことは継続しておこなっていく。参加する専門家たちが対応できることが必ずあり、外部に協力してくれる主体が多くいること、そこをつながるということを引き継いでいただきたい。
- ・湿原に関心がある学校や子どもたちのニーズに合わせた対応は可能。人数も限られているが、可能な限りサポートしていきたい。つなぐ役割はこれからも継続して実施していきたい。
- ・自然再生という事業をせっかくやっているのでも、教育の土壌、土台からそれを普及していくこと、湿原の価値を再認識していただくことが重要と考えている。子どもたちのために取り組みを進めていただけたらと思う。

4. 閉会